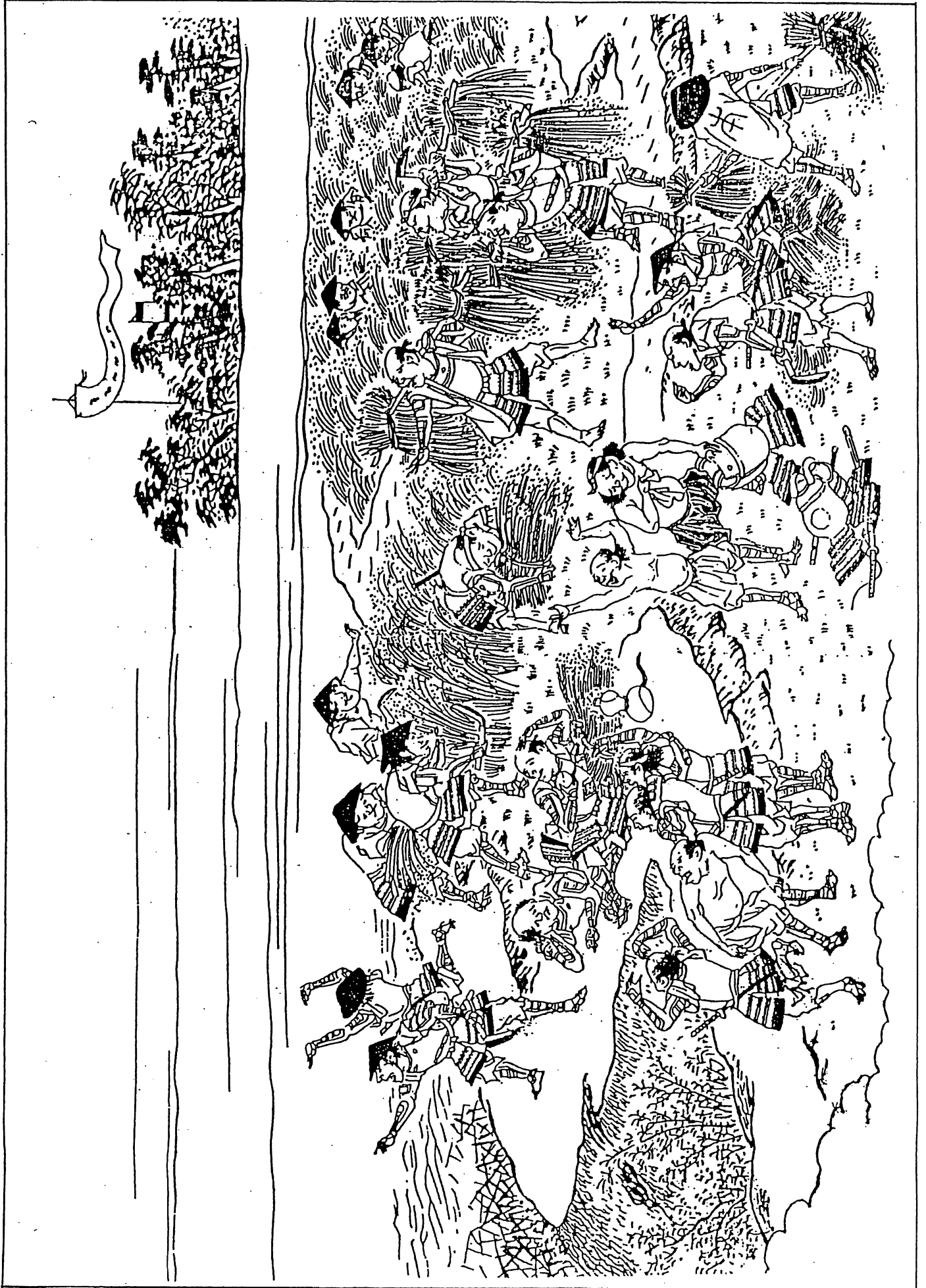




これらの仮説A群は、①教育活動は子どもの心理的特性に従属しなければならない(心理主義)、②心理的特性を異にする子どもが出会うと、理解は飛躍的に成長する(予定調和)、の2論理を基盤に成立している。ただし、実際に効果を上げている社会科授業が、必ずしもこれらの仮説を支持しているわけではない。

II 事例分析—加藤公明実践「石山合戦」—

ここでは、かつて「社会科らしい」実践と評価された¹⁾加藤公明の「石山合戦」第3時を取り上げる。同授業について、実践者の加藤自身、以下のように振り返っている。「生徒たちの戦国時代への旺盛な興味や比較的豊富な知識を活かしながら、個性的で科学的な時代認識²⁾を育んでいると。本実践を分析した尾原の論を参考にしながら³⁾、本実践における認知スタイルの活かし方をみてゆきたい。

(1) 「刈田」図の変なところ探し

導入で子どもの提示されるのが、『絵本拾遺信長記』所収の一枚の挿絵。教師は「この絵で変なところを探そう」と指示する。「変なところ」以上に余計な縛りはないので、子どもは自分なりの気づきを述べればよい。反応は以下のようなものだった⁴⁾。



- ・戦争の最中なのに稲刈りをしている
- ・一所懸命仕事している人と、さぼってお酒を飲んでいる人がいる
- ・左側の武士たちが変。川の向こうにいる敵をバカにしているみたい
- ・武士が稲刈りをしている
- ・川に向かってお尻ぺんぺんしている武士がいる

もちろん、これらの回答は思い付きではない。①自分の知っている知識と②絵に描かれた事実とのズレにもとづいて「変なところ」が指摘されている。おそらく多くの子どもが有している常識とは、「一向宗徒よりも信長軍が圧倒的に優勢だ」「戦場の武士は命をかけて真剣に戦っている」「武士の仕事とは戦である」…などではないか。歴史漫画や歴史ドラマ、学校の授業で培った知識＝常識が視点となって様々な「変な」箇所が指摘されてゆく。教師もそれを期待している。

(2) 信長軍説 or 一向宗徒説の理由付け

フリースタイルでの挿絵の解釈が終わると、もっと精緻で厳密な解釈を求める指示が与えられる。「絵に『〇〇が、〇〇をしているところ』とキャプションを付けなさい。なぜそのように見えるか、理由付けもしなさい」。子どもの発表は、以下のように展開した⁵⁾。

「信長軍の武士が米を刈り取りしている」…信長軍派の論拠

- a1 もし一向宗徒であれば、兵士たちの後ろの旗に「進者往生極楽、退者無間地獄」の字が書いてある
- a2 絵には酒を飲んでいる人が描かれているが、そんなことができるのは、戦いに慣れた余裕のある武士だけ
- a3 軍の規律が乱れているのは、信長の策略である (b1への反論)
- a4 信長軍がとても強いので一向宗徒は籠城している。追い込まれた一向宗徒が外に出て挑発するはずがない
- a5 一向宗徒が寺内町をつくっているといっても、信長軍が突破してしまえば関係ない (b2への反論)
- a6 信長軍は足軽から成り立っている。足軽というのは農民を武装させた集団だから、彼らも稲刈りは上手なはずだ (b3への反論)

「一向宗徒が米を刈り取りしている」…一向宗徒派の論拠

- b1 信長軍であれば、もっと統制が取れているはずである (a2への反論)
- b2 本願寺派の門徒は堀で囲まれた寺内町をつくっており、信長軍はその中に入ってこられない
- b3 絵に描かれている人物は鎌を使って稲を刈っているので、農民である
- b4 信長軍は武士以外の人から稲を調達できるのだから、わざわざ稲を刈り取る必要はない (a6への反論)

子どもたちは、①信長軍の兵士が一向宗徒の食糧を奪って、敵を挑発している、②一向宗徒が自分たちの食糧を運び入れて、信長軍を挑発している、それぞれの立場から自らの説＝解釈を組

み立てる。とはいえ信長軍派の優勢が揺るがない。ある生徒が目ざとく右下の兵士がまとう法被に描かれた「本」(本願寺)の字をみつけると、両派の形勢は初めて逆転した。しかし決定打に欠く。議論は収束しない。

(3) 史料にもとづく自己解釈の検証

そこで教師は、決定的な証拠として『絵本拾遺信長記』の口語訳を示した。要旨をかいつまんで紹介すると、本願寺派の門徒：下間頼龍が、淀川を挟んで信長軍が見守る中「心配無用、信長軍などは私にとっては赤ん坊同様の。稲があんなに実っているのに、我々が刈りとらなければ必ず敵に刈りとられてしまうじゃないか」と稲刈りを始める。信長軍は攻撃しようとするも、躊躇。山中に「南無阿弥陀仏」という白旗が翻るのをみつけ、「下手に攻撃すると伏兵に襲われかねい、だいたい豊かな本願寺が20日程度の籠城で兵糧が尽きるはずがない、連中はおとりじゃないか」と評定を始める。そうこうしている内に刈り取りは終わり、稲は本願寺へ運び込まれた。慌てて信長軍は渡河するが、山中の鉄砲隊に攻撃され、撤退を余儀なくされた。

子どもたちはこの史料を食い入るように読んだ。そして「石山戦争は決して信長の一方的な優勢で推移したのではなく、信長にとっても必死の戦いだった」点に気づいたという。

(4) 専門家の解釈の批判的吟味

子どもの関心が高まった機を捉えて、教師は一気に本戦争の顛末と歴史的意義に迫ろうとする。そのために用意されたのが、『週刊朝日百科・日本の歴史26号 一向一揆と石山合戦』所収の藤木久志論文。同文献には、①最終的には一向宗が信長に屈した事実、②信長も初めこそ一向宗を抹殺しようとしたが、抵抗が大きくなり、最後は天皇を担ぎ出すことで講和を結んだ事実が示される。さらに、③必ずしも「一向一揆の完全敗北とは言いきれない」「信長は一向宗を弾圧するのではなく従属させ、保護下におく方針に転換した」との解釈が提示され、検討に付される。これを契機にして子どもたちの関心は、一向宗徒と信長が対立せざるを得なかった原因を解明する方向へと向かったという。

III 子どもの認識成長を保証し、教師の存在意義を高める研究仮説へ

「石山合戦」から読み取ることのできる「認知スタイルを活かした社会科授業」の原則を抽出しよう。仮説A群のアンチテーゼがみちびけるのではないかな。

仮説B1：(社会事象に対する)認知スタイルは、子どもの既存の知識によって左右される

我々は単なる思い付きよりも、自分の経験と知識にもとづいて判断しようとする。普段の生活でも実感するように、自己の狭く閉ざされた経験と知識に左右されない判断はない。いやそれを払拭できず、しがみ付き、結果的に失敗することのほうが多いのではないかな。子どもだって同じだ。友人と遊んだり家族と話したり、旅行したり、漫画やテレビをみたり、授業を受ける過程で、社会事象に対する見方を形成している。純粋にフリーで、個人の心理的特性にのみ規制された社会認識などありえない。幾何学模様から図形を探し出すような直観的作業は別にして、日常生活と深く結びついた社会事象についての思考・判断は、それまでの社会経験と社会研究で身につけた知識(の量と質)に大なり小なり縛られる。

先の加藤実践は、この点を逆に利用しようとした。子どもが既にもっている知識、すなわち、圧倒的な軍勢力で全国平定を成し遂げた武将としての信長像を、意図的にメタ認知させようとした。その手立てが、導入で行われた「変なところ探し」だったのではないかな。子どもの既知＝常識をわざと表出させ、それを自覚させる機会を与えたのではないかな。